

「研究ノート」キヤスターニュースと娯楽化をめぐる用語の定義

木下浩一

一 はじめに

筆者はここ5年ほどにわたり、一九五〇年代後半から一九七〇年代半ばの民放テレビを対象に教育、なかでも社会教育の観点からメディア史研究を行ってきた。分析においては吹き替えやクイズ番組などの形式に着目したが、さらにニュースショーという番組形式に着目して論考を行なった¹⁾。

日本におけるニュースショーの嚆矢は、一九六四年に放送が始まった日本教育テレビ(現・テレビ朝日)の《木島則夫モーニング・ショー》とされている(以下、番組名は《》内に表記する)。しかし《木島》以前にも、様々な試行が在京各局でなされていた。試行のなか

から、例えば、ラジオにおけるディスクジョッキーという司会スタイルや、週刊誌を模した「マガジンスタイル」などの形式が《木島》に導入され、結果として同番組は高い視聴率を得た。《木島》の成功をみた在京各局は、一九六五年から六六年にかけて《木島》を模倣し、ニュースショーという形式は急速に普及した。一九六〇年代半ばのニュースショーは、司会者重視であった。しかしながら、視聴者に対する司会者の訴求力は急速に低下し、一九六〇年代後半になると、各局のニュースショーは軸足を内容へと移した。それとともにニュースショーは、ワイドショーと呼ばれはじめる。一九七〇年代以降、ニュースショーはスキヤンダリズム化、あるいはセンセーシヨナリズム化が進み、ニュースショーより

もワイドショーという呼称が一般的となった。

ニュースショーを対象に研究を進めるなかで副次的にわかったのは、ニュースショーの萌芽・発展とほぼ同時並行的に、キャスターニュースという新たな形式も萌芽・展開したことである。一九六〇年代、日本のテレビジャーナリズムはテレビ独自のジャーナリズムを模索したが、同時期のテレビジャーナリズムの総体を明らかにするには、ニュースショーだけでなく、キャスターニュースについても明らかにする必要があると思われる。

さらに、ニュースショーの分析を通じて実感したもうひとつの課題は、テレビジャーナリズムにおける用語の定義が曖昧だということだ。勿論、言葉が指し示す内容は時代とともに変化するのが常である。しかしながらテレビを対象とした学術研究や批評は、少なくとも一九五〇年代後半から一九七〇年代のテレビジャーナリズムを対象とした論考において、用語の定義が曖昧であると言わざるをえない。学術研究においては、用

語の定義は操作的になされることも多く、論者によって十人十色といつてよいだろう。しかしながら、それだけの論考や知見を共有するためには、一定程度、共有された定義が必要となろう。

そのような問題意識のもと、本研究ノートでは、キャスターあるいはキャスターニュースとそれに近接する用語を、テレビジャーナリズム研究がどのように定義してきたのかについて検討する。主な用語を具体的にあげれば、キャスター／キャスターニュース／ハードニュース／ソフトニュースの四つである。

しかしながら、テレビジャーナリズムに関する研究には膨大な蓄積がある。それらすべてを網羅的に渉獵するのは極めて困難だ。したがって本稿は、キャスターあるいはキャスターニュースについて現在もつとも広範に検討している論者の一人である、深澤弘樹の論考を参照しつつ検討を進める。

深澤の大きな問題関心のひとつは、ニュースの娯楽化である。深澤によれば、「テレビニュースは一九八〇

年代以降、娯楽化の進行が指摘されている」⁽¹⁰⁾という。

深澤のいう娯楽化とは、「ソフトニュースと呼ばれる各地の話題ネタやスポーツ、芸能などのやわらかめのニュースが増えたり、フリップやテロップ、CGなどニュースの表現方法が多様化すること」⁽¹¹⁾である。深澤の関心の対象はキャスターやキャスターニュースであるが、深澤によればキャスターニュースは、「情報番組、ワイドショーとの区別がなくなってきたもいて、番組の境界がぼやける、いわゆるオフジャンル化も起きている」⁽¹²⁾という。深澤はテレビニュースの娯楽化の分析にあたり、内容だけでなく形式に着目し、さらに「内容面と形式面での区分にとらわれない」マルチメディア分析—具体的にはキャスターの所作などによるメッセージ伝達—の導入を試みている。

本論に入る前に、本稿が主に扱う四つの用語、すなわちキャスター／キャスターニュース／ハードニュース／ソフトニュースの定義について若干断っておく。これらの用語は、学術研究において必ずしも、明確な定義

がなされていない。理由はいくつか推測できるが、ひとつは、これらの用語は放送の実際に基づいた用語であり、番組制作者がジャンルや形式の定義に意識的でないことが推察される。そのため、資料概念に基づいた厳密な分析は困難となる。また、規範論などにおいては、番組やその内容、あるいはメディア言説などに着目することが多く、特定の番組群を指し示す用語の定義が必要ないことも理由のひとつと考えられる。

本稿の構成について述べる。第二節では、「キャスター」あるいは「キャスターニュース」について、深澤の定義を他の研究者の定義と比較して相対化し、その上で「キャスター」「キャスターニュース」の定義化を試みる。第三節では、「ハードニュース」と「ソフトニュース」について検討する。キャスターニュースは、ニュースの娯楽化の文脈で論じられることが多く、硬派のニュースをハードニュースと呼ぶのに対して、娯楽化したニュースはソフトニュースと呼ばれることが多い。海外に目を移すと、Boczkowski, P. J. はハードニュー

ストソフトニュースの再定義を試みている。深澤の議論と比較しつつ、ハードニュースあるいはソフトニュースという概念について検討する。第四節では、筆者のニュースショー研究から得られた知見から、キャスターニュースとニュースショーについて若干の比較検討を行う。

尚、キャスターとニュースキャスターは、資料概念として扱う場合は区別が必要となる可能性もあるが、本稿はジャーナリズムの範疇において論じるため、同一に扱うこととする。

二 「キャスター」と「キャスターニュース」

(一) ジャーナリズム関連の事典における定義

一般視聴者の認識は、キャスターはニュース番組の司会者であり、キャスターが司会を務めるニュース番組がキャスターニュースといったものである。おそらく後者を耳にすることは少なく、場合によっては認識すらしていないと思われる。それに対して前者は、

番組などで「キャスターの○○」というコメントが時折でてくるように、比較的一般的であろう。「お天気キャスター」などは、より一般的かもしれない。

本節では、まずジャーナリズムやメディア関連の事典や百科における定義をみていく。ここでは四冊を取りあげる。時間軸上での変化を考慮し、時系列でみていく。先に述べておくと、各書の見出し項目は「キャスター」あるいは「ニュースキャスター」という人に関するものであり、「キャスターニュース」などの番組や内容に関する項目はなかった。

一九八三年に編まれた倉橋健・竹内敏晴監修『演劇映画テレビ舞踊オペラ百科』（平凡社）は、ニュースキャスターを次のように定義している。

ラジオ、テレビのニュース番組で、ニュースそのものを伝えるとともに、解説や批評を加えながら番組を進行させる人のこと。（略）事件の背景、影響などを伝えようとするれば、必然的に判断や批判が生

まれることになり、それを正しく行うためには専門的な知識や経験が必要となる。とくにテレビのニュースでは、それを伝える人の個性や印象が、番組の信頼性にかかわってくる⁵⁵⁾。

ポイントを列挙すると、「解説や批評」「専門的な知識や経験」「個性や印象」の三つとなろう。キャスターとは、単にニュースを伝えるだけでなく、専門的な知識や経験に基づいて解説や批評を加え、さらに視聴者に信頼を与えるような個性を有している出演者ということになる。

一九九四年発刊の石川弘義他編『大衆文化事典』（弘文堂）は、キャスターについて次のように記述している。

ラジオ、テレビのニュース番組に出演し、ニュースの伝達、解説、批評を行いながら、番組を進行させる人。（略）キャスターを務めるのは、主として、新聞記者、放送記者、アナウンサーなど、取材経験の豊富

なジャーナリストである。しかし最近では、ニュース番組のショー化にともない、芸能タレントの起用もみかけられる。（略）当初、キャスターは伝達者としての性格が強かった。しかし今日では、コーナー担当アナ、レポーター、コメンテーターらを統括し、番組の個性をプロデュースする存在である⁵⁶⁾。

前半部分は、『演劇映画テレビ舞踊オペラ百科』と同様である。しかしながら「最近では」以降の後半部分では、キャスターを務める出演者の出自やバックボーンの拡大に言及している。端的にいえば、必ずしも記者などのジャーナリズム経験がなくともよいということだ。

一九九七年発刊の日本民間放送連盟編『放送ハンドブック（新版）』（東洋経済新報社）は、実務家を対象にテレビの実務全般を解説した書である。同書は「キャスターに定義はない」⁵⁷⁾としながらも、キャスターの特徴を次のように述べている。

複雑多様な情報を、受け取る側の視聴者一人ひとりに送り届ける「生身の人間」、という概念を帯びている。(略) ある程度の一般常識と報道の経験が必要とされる。(略) アナウンサーが原稿を正確に、わかりやすく読み上げるのを主な任務としているのに対し、キャスターはニュースの中身を理解し、原稿を読むだけでなく、その意味を自分の言葉に言い換えて伝える力のある人という意味が込められていた^八。

キャスターはアナウンサーと異なり、視聴者に訴求する人間性とともに「報道の経験」を有し、「自分の言葉」で伝える能力が必要だとされている。しかし一方で同書は、「キャスターとアナウンサーの違いは(略)判然としなくなってきた」とも述べている。

二〇一一年に発刊された渡辺武達・山口功二・野原仁編『メディア用語基本辞典』(世界思想社)は、「ニュース・キャスター」について、次のように記述している。

ニュース・キャスターとアナウンサーの相違であるが、前者が番組の司会・進行とニュースに関する解説を行うのが主な役割で、原稿を読まないケースもあるのに対して、後者は原稿を読むことが一義的な役割であり、原理的には両者は異なっている。しかし、日本ではアナウンサーが番組の司会・進行を行うこともあり、両者の区分は曖昧である^九。

「原理的」に異なっているとしながらも、やはりアナウンサーとキャスターの境界の曖昧さが指摘されている。四冊が言及したキャスターの特徴や要件は共通しており、「解説や批評」「専門的な知識や経験」「個性や印象」の三つのポイントに集約される。その上で、アナウンサーとキャスターの区分は曖昧であるとしている。

(二) 深澤弘樹の定義

深澤は、キャスターあるいはキャスターニュースについて、次のように言及している。

ニュースキャスターというと、単に原稿を読むアナウンサーとは違い、自らの意見を主張する人として見える傾向がある。その場合、放送局のアナウンサーというより、ジャーナリスト、タレントなどパーソナル性を全面に押し出す人が想定されるであろう。しかし本書では、ニュースキャスターをニュースの読み手と幅広くとらえ、放送局のアナウンサーやコメントーターも含めたテレビニュースにおける出演者全体を「キャスター」と呼ぶことにする¹⁰。

深澤はキャスターを「ニュースの読み手」あるいは「テレビニュースにおける出演者全体」とのみ定義し、キャスター周辺について広く検討を加えている。深澤は別の論考において、ニュースキャスターを「レギュラーでスタジオに出演し、ニュース読みを担当しているもの¹¹」(二)と定義している。キャスターを通じたコミュニケーションの総体を明らかにするには、分析対象を広くし、

事例の漏れや抜けを避ける必要がある。その意味で深澤の定義は一定程度、有効であると思われる。

日本のテレビ放送にキャスターが登場したのは、一九六〇年代だとされる。それ以前のニュースの読み手は専らアナウンサーであった。テレビ独自のニュース形式を模索するなかで登用されたのがジャーナリストであり、後にキャスターと呼ばれるようになった。それ以降ニュースのキャスターは、現役かそうでないかはさておき、主にアナウンサーかジャーナリストのいずれかであった。しかしながら、現在に続くその後の状況を見ると、官僚経験者やお笑い芸人あるいはアイドルなど、キャスターの出自はアナウンサーやジャーナリストという枠に収まっていない。したがって、キャスターの機能などの分析にあたっては、アナウンサーやジャーナリスト以外の属性をもつ人物も当然、対象に含めるべきである。その意味で、深澤の定義は妥当であり、むしろキャスターの出自が拡大している現状に適しているといえる。

しかし一方で、テレビニュースのレギュラー出演者というだけの定義では、たとえ分析にあたっての操作的な定義として有効であったとしても、各研究者のなかで何らかの共通の像を結び、知見が共有されることは難しい。学術研究において、広義の定義は精緻な議論に向かない。狭義だからこそ、精緻な議論が可能となる。極端にいえば、もしキャスターの定義がテレビニュースのレギュラー出演者なのであれば、もはや「キャスター」という言葉を用いる必要もない(資料概念であれば話は別である)。やはり何らかの要件や特徴などを含めた定義が必要となろう。深澤自身も、広義の定義を用いて分析を行い、その分析から抽出した要件や特徴をキャスターの定義にフィードバックし、キャスターの学術的定義を目指しているようである。

(三) 他の論者の定義における要件と特徴

既述のように、キャスターやキャスターニュースについて操作的な定義を導入した論者は、思いのほか少

ない。したがって以下では定義を広く捉え、「キャスター」は一般に〇〇とされる「〇〇をキャスターニュースと呼ぶことが多い」といった、論者の印象に近い記述も定義とみなし、論を進める。少なくとも当該の論者は、そのような「定義」を「キャスター」「キャスターニュース」と認識した上で論考・論述を行っており、その意味において一定程度、定義としての性質を含んだ言及とみなすことは可能であろう。

日高一郎は、一九六二年に放送が始まったTBS《ニュースコープ》のニュースキャスターについて、次のように述べている。

ニュースキャスターは、アナウンサーの堅さと比べ幅の広い知識を持ったイメージで、ただ書かれている文を読むだけという印象から、人間くささを画面に感じさせ、親近感を覚えさせるようになった。以後、スター的要素も加味されて、女性キャスターの登場となり、ニュースは男性のものから女性や子供た

ちの間にまで浸透する身近なものになった^(二)。

日高はニュースキャスターを、アナウンサーと対比させて描写している。二項の比較であることから、それぞれの逆は、もう一方の性質と考えられる。アナウンサーとキャスターの特徴や要件を抽出すると、次のようになる。

【アナウンサー】

- ・ 堅い
- ・ 幅の広い知識を持たない
- ・ 書かれている文を読むだけ
- ・ 人間くささを感じさせない
- ・ 親近感を覚えさせない
- ・ スターの要素がない

【キャスター】

- ・ 柔らかい

- ・ 幅の広い知識を持つ
- ・ 文を読むだけではない
- ・ 人間くささを感じさせる
- ・ 親近感を覚えさせる
- ・ スターの要素がある

以上は、あくまでキャスターが視聴者等に与える印象である。当該のアナウンサーやキャスターが、実際にそうであるか否かは問題ではない。

NHKアナウンサー史編集委員会は、同TBS《ニュースコープ》について次のように言及している。

解説をまじえてニュースを伝える本格的な「キャスターニュース」である。(略) キャスターには、アナウンサー、放送記者、ジャーナリスト出身者などがあたり、その個性、ニュースに対する姿勢や視点が強く押し出され、そのパーソナリティーが視聴者にアピールするようになる。それはニュースの背景や、映

像にしにくいニュースを伝える手段として重要な役割を果たすことになる。つまりパーソナリティーを生かしたトークニュースである(三三)。

同編集委員会もキャスターを、アナウンサーと対比させて記述している。特徴や要件を抜き出して列挙すれば、次のようになる。

【アナウンサー】

- ・ 解説を交えない
- ・ アナウンサーのみ
- ・ 個性や個人の視点などを押し出さない
- ・ パーソナリティーが視聴者にアピールしない
- ・ トークニュースではない

【キャスター】

- ・ 解説をまじえる
- ・ アナウンサーや放送記者や元ジャーナリスト

- ・ 個性や個人の視点などを押し出す
- ・ パーソナリティーが視聴者にアピールする
- ・ トークニュースである

同委員会は、《ニュースコープ》と対比させる形で、一九六五年開始のNHK《スタジオ一〇二》の司会者に言及している。同委員会によれば、《スタジオ一〇二》に代表されるキャスターは、次のようになる。

政治、経済から芸能、スポーツに至るまで、幅広いニュースを歯切れよく伝えるとともに、短い時間の中でポイントを突いたインタビューやアドリブも要求される。しかも朝の放送にふさわしいさわやかさは欠かせない。ニュースをアナウンサーがストレートに読む、それまでのいわゆるリードニュースが「書きことば」のニュースとするならば、これは「話しことば」のニュース、あるいは対話形式のニュースである。(略)当然、司会者のキャラクターが番組

のイメージを左右する^{二四}

一九六〇年代のTBS《ニュースコープ》とNHK《スタジオ一〇》は、キャスターあるいはキャスターニュースの原型といってよい存在だ。萩原滋は、上記の二つの番組に加えて、一九七四年に放送が開始されたNHK《ニュースセンター九時》について、次のように言及している。

総合編集のワイドニュース(略)にテレビ的演出を加え(略)活字メディア出身のジャーナリストを起用して、現在のキャスターニュースの基礎を築いたのはTBS(略)「ニュースコープ」である。(略)アナウンサーが原稿を読むという伝統的なNHK型のニュースとは異なる番組作りが企図されていた。これに対してNHKは(略)「ニュースセンター9時(NC9)」を開始して、それまでのストレートニュース中心の構成から離れた新しいスタイルのニュース番

組の創出を試みている^{二五}。

この他、今村庸一は、次のように述べている。

キャスターニュースというのは、放送局のアナウンサーが原稿を読むのではなく、あくまでもキャスター自身の視点から物事を見て、時には批評したり意見を述べたりする番組である。当然、キャスターにはそれなりの裁量権が認められる^{二六}

キャスターやキャスターニュースの定義は様々であるが、しかしながら管見の限り、以上でキャスターやキャスターニュースの特徴や要件は「飽和」状態にあり、ほぼ出尽くしたといつてよい。

以上をまとめると、出演者としては、アナウンサーとキャスターが対義となり、番組としては、ストレートニュースとキャスターニュースが対義となっている。さらに、前者の一对は出演者という水準であるのに

対して、後者はニュースや番組という水準であり、後者は、前者の出演者によつて強く規定されていることがわかる。言い換えれば、ストレートニュースはアナウンサーに代表され、キャスターニュースはキャスターに代表される。ストレートニュースの特徴や要件は、狭義の読み手としてのアナウンサーの特徴や要件とほぼ重複し、同様に、キャスターニュースの特徴や要件はキャスターのそれらと重なる。追記するならば、廣谷鏡子と米倉律によれば、キャスターニュースは「比較的長時間の枠で放送される」(二七)番組である。

これらの特徴や要件を、三つに分けてまとめる。三つの分類は、(1) ニュースの内容 (what : 何をとりあげるか)、(2) 司会者 (who : どのような人が伝えるか)、(3) 演出 (how : どのように伝えるか) である。

【ストレートニュース】

〈What〉

- ・ 政治や経済のみ

〈Who〉

- ・ アナウンサーのみ
- ・ 幅の広い知識を持たない
- ・ 文を読むだけ
- ・ 人間くささを感じさせない
- ・ 親近感を覚えさせない
- ・ スターの要素がない
- ・ パーソナリティが視聴者にアピールしない
- ・ 番組のイメージがない
- ・ 裁量権がない

〈How〉

- ・ 堅い
- ・ 解説や批評を交えない
- ・ 個性や個人の視点などを押し出さない
- ・ 歯切れがよくない
- ・ 読むだけ (インタビュアーやアドリブがない)
- ・ 『書きことば』のニュース
- ・ テレビ的演出がない

- ・時間的に短い

【キャスターニュース】

〈What〉

- ・政治・経済・芸能・スポーツなど幅広いニュース

〈Who〉

- ・アナウンサーや放送記者や元ジャーナリスト
- ・幅の広い知識を持つ
- ・文を読むだけではない
- ・人間くささを感じさせる
- ・親近感を覚えさせる
- ・スター的要素がある
- ・パーソナリティーが視聴者にアピールする
- ・番組のイメージがある
- ・裁量権がある

〈How〉

- ・柔らかい
- ・解説や批評をまじえる

- ・個性や個人の視点などを押し出す

- ・歯切れがよい

- ・ポイントを突いたインタビューやアドリブがある

- ・「話しことば」や対話形式によるニュース

- ・テレビ的演出がある

- ・時間的に長い

最後の二項目を除き、他のすべては司会者に関わるものである。キャスターには多くの経験や能力が求められ、それらをもとに、ニュース原稿を「読む」以外の多様な働きが求められる。批評などを含んだ広い意味でのジャーナリズム経験は、必須といってよいだろう。

以上から、キャスターあるいはキャスターニュースの要件や特徴を含んだ定義を設定してみよう。まずキャスターに求められる要件をまとめると、次の三つとなる。

- ・ジャーナリスト経験などをもとにした幅広い知識
- ・視聴者に対して訴求するパーソナリティー

- ・ ニュース内容などに対する一定程度の影響力
- 以上を有した上で、単にニュースを読むだけでなく、
- ・ 批評や解説、あるいはアドリブを加える
- ・ インタビュウなどを行う

などの行為が、番組内において求められる。文章化すれば、キャスターは、「ジャーナリストなどの体験をもとにした幅広い知識と視聴者に訴求するパーソナリティ、さらに内容などに対する影響力を有し、番組中にアドリブを交えながら批評や解説を加え、時にはインタビュアーなども務める司会者」となる。

一方、キャスターニュースの要件や特徴は、次の三つにまとめられる。

- ・ 上記のキャスターが番組の司会を務める
- ・ 話し言葉や対話形式が多く、わかりやすく親しみやすい
- ・ テレビ的演出が多く含まれる

文章化すれば、キャスターニュースは、「キャスターが

番組の司会を務め、テレビ的演出が多く施され、話し言葉や対話形式などによって、わかりやすく親しみやすい形式でニュースを伝える比較的長時間の番組」となる。

三 「ハードニュース」と「ソフトニュース」

既述のように、深澤の大きな問題関心のひとつはニュースの娯楽化にある。またキャスターニュースも、娯楽化の観点から論じられることが多い。

一般的にニュースは、政治や経済などを主に扱うハードニュースと、芸能などを含めた社会一般を扱うソフトニュースに二分される。後者のソフトニュースは、スキャンダリズムやセンセーショナルリズムの点から批判されることが多く、番組ジャンルとしてはワイドショーが代表的であろう。

深澤はハードニュースとソフトニュースについて、「何をもってハード／ソフトニュースとするのかは統

一的な見解はない」^(二六)としながらも、複数の先行研究を検討した上で、次のような分類を導入している。

・ハードニュース

政治(行政、福祉)／経済(産業)／社会(犯罪、事件、事故、裁判、災害)／国際(外交関係)／軍事(防衛、戦争、革命)

・ソフトニュース

話題(行事、風物、芸能、人物)／生活(家庭)／気象／文化(教育、科学、風俗)／スポーツ^(二七)

深澤によれば、「ニュース内容のジャンルを読みとりハードニュースなのかソフトニュースなのかを判断することはある種の困難を伴う」^(二八)という。この「困難」の克服のため深澤が試みたのが、マルチモダリティ分析であった。

Boczowska は、ニュースギャザリング(ニュース収集)の方法に着目している。ニュースルームにおけるニ

ュースギャザリングの方法が、デジタル化などによって高度に多様化することで、ハードニュースとソフトニュースの差異が融解しているという^(二九)。管見の限り、ハードニュースとソフトニュースという区分そのものが、海外研究においてはすでに、それほど使われなくなっている。英語圏におけるテレビジャーナリズム研究は、詳細な事例研究の蓄積が行われているのが現状だ^(三〇)。

深澤が指摘するように、何をもってハードニュースとソフトニュースとを区別するかは、難しい問題である。ハードニュースの典型は政治ニュースである^(三一)が、しかしながら政治ニュースを娯乐的に伝えた場合、それはソフトニュースに区分すべきかもしれない。一方でエンターテイメントを取り上げた場合でも、硬い論調で伝えた場合はハードニュースとなるだろう。あるいは、送り手がハードニュースとして放送したとしても、受け手はソフトニュースと認識している可能性もある。逆もまた同様である。

Reinemann らは、ハードニュースとソフトニュースという概念を再検討した上で再定義を試み、「harder and softer news」という新たな概念を提出している^{三〇}。同概念は、(一) 題材 (topic/events) (二) 焦点 (news focus) (三) 様式 (news style) の三つの観点 (dimension) に基づいている。三つの観点はそれぞれ、個別具体的なニュースの、(一) 放送で扱われる事項 (The subject matter covered) (二) 特定の強調された側面 (the specific aspects of events or topics emphasized) (三) 映像あるいは口語での提示のされ方 (the way events or topics are visually and verbally presented) である。Reinemann らによれば、(一) の「放送で扱われる事項」が基盤であり、その上に「特定の強調された側面」と「映像あるいは口語での提示のされ方」があるという。最終的に Reinemann らが提出した「harder and softer news」の定義を次に示す。

ニュース項目が政治に関連しているほど、テーマ

に沿った形で、出来事が社会にもたらした結果に焦点が当てられ、非人格的かつ非感情的な表現様式で放送され、よりハードニュースとみなすことができる。ニュース項目が政治に関連していないほど、エピソードとして、個別の結果に焦点が当てられ、個人的かつ感情的な表現様式で放送され、よりソフトニュースとみなすことができる^{三四}。

「項目」を議題 (agenda) と考え、Reinemann らの主張は、議題とフレーミング (framing) という分析概念を細分化したものと考える。「harder and softer news」という概念がどの程度有効かは、個別の事例研究の結果を待たねばならない。しかし、少なくともハードニュースとソフトニュースに関する概念上の要件を明確にしたという点において、一定程度の評価はできるのではないだろうか。

四 キヤスターニュースとニュースショー

冒頭で述べたように、一九六〇年代の日本のテレビジャーナリズムの発展過程を見る限り、ニュースショーとキヤスターニュースはそれぞれ、ひとつの系譜をなしている。しかしながら現在放送されている番組においては、ニュースショーとキヤスターニュースの境界は不明瞭である。例えば、ニュースショーやワイドショーであっても、司会者がキヤスターと呼ばれることは多々ある。既述のように、キヤスターそのものが変化し、お笑い芸人やタレントなど、ジャーナリズム経験がまったくない人物がキヤスターを務めることも珍しくない。

しかしながら、われわれ一般視聴者は、ストレートニュースを源流とするキヤスターニュースと、ニュースショーを源流とするワイドショーや情報番組を、無意識のうちに区別しているのではないだろうか。例えて言えば、ニュースショーやワイドショーはあくまで「シ

ョー」であり、キヤスターニュースは「ニュース」である。前者は「ショー」であるので、娯楽化が相当程度許され、後者はあくまで「ニュース」であり、娯楽化はそれほど許されない。ハードニュースとソフトニュースという言葉を用いないものの、娯楽化しているのは主に後者であるというのが、曖昧ながらも一般視聴者の認識ではないか。

送り手内部の番組制作においても、「ショー」と「ニュース」の区別はあるようだ。例えばニュースショーでは、スタッフのほとんどは外部プロダクションに所属し、テレビ局の社員は極めて少ない。それに比べてキヤスターニュースは、相対的にテレビ局員が多い。記者クラブなどと親和性が高いのは後者であり、前者は直接的に関与しない。政治家や官僚と向き合い、また様々なコストがかかる部分は労働コストの高い局員に担当させ、そうでない部分は外部スタッフなどにアウトソーシングしているのが実態だ。送り手も受け手も、ニュースショーとキヤスターニュースの間に、一定程度の垣

根を作っているように映る。

以下、本節では、筆者が行った一九六〇年代を中心としたニュースショーの歴史的分析をもとに、ニュースショーとキャスターニュースの観点(dimension)について若干の検討を加えたい。

キャスターニュースの特徴や要件は、本稿の第二節で示した。観点のみ抽出し列挙すると、次のようになる。

【キャスターニュース】

〈What〉

- ・芸能・スポーツなど幅広いニュース

〈Who〉

- ・アナウンサーや放送記者や元ジャーナリスト
- ・幅の広い知識を持つ
- ・文を読むだけではない
- ・人間くささを感じさせる
- ・親近感を覚えさせる
- ・スター的要素がある

- ・パーソナリティーが視聴者にアピールする

- ・番組のイメージがある

- ・裁量権がある

〈How〉

- ・柔らかい

- ・解説や批評をまじえる

- ・個性や個人の視点などを押し出す

- ・歯切れよい

- ・ポイントを突いたインタビューやアドリブも

- ・話したことばや対話形式のニュース

- ・テレビ的演出あり

- ・時間的に長い

【ニュースショー】

*キャスターニュースと大きく異なるのは、次の三つのみである。

〈Who〉

- ・さらに多くのバックボーンの人たち
- ・必ずしも幅広い知識はない

・文を読むことはない

第二節で抽出した特徴や要件に関していえば、ニュースショーの司会者は、キャスターニュースのそれに比べて、出自やバックボーンがさらに拡大し、必ずしも広い知識が要求されない。またニュースショーの司会者は、基本的に原稿を読むことから解放された。それら以外の点については、程度の差はあるものの、ニュースショーとキャスターニュースは特徴や要件が大きく重なり合っている。

では、ニュースショーとキャスターニュースの違いは、司会者のバックボーンや出自だけなのだろうか。ニュースショーの歴史的分析からは、ニュースショーにおける司会形式は、ラジオのディスクジョッキー(DJ)の模倣であり、中小スポンサーへの訴求が当初の狙いであった^{二五}。また同時に導入されたのが、週刊誌を模したマガジン形式であった^{二六}。複数の司会者が「DJ」を務めることで、ひとつの番組内に週刊誌のような多

様な内容を混在させ、それによって中小スポンサーへの訴求力を高めることを送り手は企図したのである。キャスターニュースの萌芽と展開についても、明らかにすべきことは多いと推察される。

五 おわりに

キャスターニュースの誕生と展開についての先行研究の整理は、稿を改めることにしたい。管見の限りでは、番組の形式や内容についての分析はみられるものの、内在的に送り手を分析したものは少ない。キャスターやキャスターニュースの表面上の変化を超えて、送り手がどのような力学のなかで何を企図し、どのような帰結がもたらされたのか。これらの理解がなければ、ニュースの娯楽化を十全に理解し、また理論化することは難しい。内容分析の重要性は否定しないが、一方で限界があるのも事実であろう。

深澤の興味・関心の中心はキャスターにあるようだ

が、送り手をより深く理解するためには、キャスター以外の送り手も分析対象とする必要がある。例えば松井英光は、送り手を編成と制作に分けるなどの詳細な分析を主張している^(二七)。

送り手や制作過程を詳細にみる傾向は、海外研究においてもみられる。日本の送り手を対象とした事例研究は、またまた不十分である。事例研究を積み重ねた先にはそれらの比較検討があり、そこからようやく、送り手を含めた理論化が可能となる。

本稿では、キャスターあるいはキャスターニュースの定義を巡って検討してきた。一点付け加えるならば、用語の定義そのものだけでなく、水準についての共有も必要であろう。

具体的にいえば、キャスターは出演者という水準であり、これについてバラツキはない。しかしキャスターニュースには、番組とニュース形式の二つの水準が混在している。キャスターニュースが番組全体を指す場合と、番組の一部を指す場合があるのだ。このあたりに

自覚的なのか、NHK放送文化研究所の論考では、「キャスターショー型」ニュース番組と表記するなど^(二八)、水準が番組であることが明確な文章表現となっている。キャスターニュース同様に、ハードニュースとソフトニュースについても、番組とニュース形式の二つの水準が混在している。冒頭で述べたように、用語の定義は各研究者によって多様であるが、水準を含め、一定程度は共有あるいは共通化した方がいいように思われる。

最後に、現状のテレビ放送について一言及しておきたい。現在、日本の地上波テレビは、ニュースショー／ワイドショー／情報番組／キャスターニュースといったジャンルの番組が、極めて大量に編成されている。例えば日本テレビは、月曜から木曜の朝4時から夜7時の15時間のうち14時間35分をソフトニュースで編成している。率にして、実に約97%と高率である^(二九)。これらの番組は、ニュースショー／ワイドショー／情報番組／キャスターニュースといったジャンルの

特徴を多数有しているものの、番組自らは自身の番組ジャンルを明示していない^{三〇}。テレビ局のホームページをみると、これらの番組は「ニュース・情報」などのカテゴリーに含まれている。しかしながら各番組のページに、自らの番組ジャンルへの言及はない。番組ジャンルを明示しない傾向は、東京・大阪の各局のホームページを見る限り、共通している。

一方で、各局は番組種別、例えば「報道」「教育」「教養」などは公表している。各番組がどの種別を含むかは、各局のホームページなどを見れば明らかだ^{三一}。管見の限り、キャスターニュースの系譜に属すると思われる番組^{三二}は、「報道」「教育」「教養」の三つの種別を含む

三〇 筆者が操作的に導入した「ニュースショー」の定義は、「ニュースを主な内容とし、主夫視聴者が限定され、帯の生放送で編成された45分以上の番組」であった。

三一 深澤弘樹「テレビニュースの娯楽化とマルチメディア分析の可能性」『駒澤社会学研究』駒澤大学文学部社会学科、二〇一二年、二八頁。

三二 同前。

三三 同前。

三四 倉橋健・竹内敏晴監修『演劇映画テレビ舞踊オペラ百科』平凡社、一

ことが多く、ニュースショーの系譜の番組は、それら三つに「娯楽」が付加されることが多いようだ。番組ジャンルの問題は、番組種別との関連のなかでみる必要があるだろう。その意味では、番組編成研究についても整理する必要がある。

深澤が主な分析対象としているキャスターについても、引き続き検討の必要がある。筆者の印象に過ぎないかもしれないが、出演者を中心に、これまでとは別種の「娯楽化」が、現在のニュースや情報番組において進行しているように思う。これらについては稿を改め、検討することとしたい。

九八三年、三三五頁。

三五 石川弘義他編『大衆文化事典』弘文堂、一九九四年、一九三頁。

三六 日本民間放送連盟編『放送ハンドブック（新版）』東洋経済新報社、一九九七年、一九二頁。

三七 同前、一九二頁。

三八 渡辺武達・山口功二・野原仁編『メディア用語辞典』世界思想社、二〇一二年、二〇五―二〇六頁。

三九 深澤、前掲論文（二〇一二年）、一九頁。

- (二) 深澤弘樹「ローカルニュースの『現在』：全国地方局アンケートから」『駒澤社会学研究』四七号、二〇一五年、一五一頁。
- (三) 日高一郎『日本の放送のあゆみ』人間の科学社、一九九二年、一八九頁。
- (四) NHKアナウンサー史編集委員会『アナウンサーたちの70年』講談社、一九九二年、三二二―三二三頁。
- (五) 同前、一五九頁。
- (六) 萩原滋編著『変容するメディアとニュース報道』丸善、二〇〇一年、一三頁。
- (七) 今村庸一「テレビジャーナリズムの里程」『マス・コミュニケーション研究』第六三号、二〇〇三年、四五頁。
- (八) 廣谷鏡子・米倉律「テレビ美術から見る『キャスターショー』の誕生と発展」『放送研究と調査』二〇〇九年一月、五七頁。
- (九) 深澤弘樹「内容分析からみるローカルニュースの現状」『駒澤社会学研究』第四八号、二〇一六年、一五六頁。
- (一〇) 同前、一七七頁。
- (一一) 深澤、前掲論文(一〇一)、三三三―三四頁。
- (一二) Bozkowski, P. J. (2009). Rethinking Hard and Soft News Production: From Common Ground to Divergent Paths. *Journal of Communication*, 59, 98-116.
- (一三) 木下浩一「テレビの送り手を対象とした海外の研究動向」『京都メディア史研究年報』第五号、二〇一九年、四八頁。

- (一四) Reinemann, C., Senyef, J., Scherr, S., & Lyanante, G. (2012). Hard and soft news: A review of concepts, operationalizations and key findings. *Journalism*, 13(2), 221-239.
- (一五) Reinemann[2012]p.233°.
- (一六) 木下浩一「テレビにおけるソフトニュースの原型：1960年代の日本教育テレビのニュースショー」『社会情報学』第八巻、頁、二〇一九年、一三二―一三三頁。
- (一七) 同前、一三三頁。
- (一八) 松井英光「送り手」と「作り手」を分離した視座によるテレビ研究の再構築」『広島大学大学院総合科学研究科紀要』三、文明科学研究』第一〇号、二〇一五年、二二六頁。
- (一九) 廣谷・米倉、前掲論文、五六頁なご。
- (二〇) 同局のホームページの番組表をもとに算出した。 <
[http://www.nbc.jp/](http://www.nbc.jp/program/)> (最終アクセス日二〇一〇年一月四日)。
- (二一) スポンサー資料などにおいては、明記されている可能性はある。
- (二二) 例えは日本テレビは、以下のURLで公表している。 <
<http://www.nbc.co.jp/shinsei/program.html>> (最終アクセス日二〇一〇年一月四日)。
- (二三) 民放の場外、夕方6時台、あるいは夜10時や11時台が、ハードニュースを多く含むキャスターニュースの時間となっている。NHKは、夜7時台と6時台が多い(朝などにおける比較的短い番組を除く)。